

ビオトープ有峰記念館跡地の変化を予想しあおう

中川正次



写真1. 筆者は左端。2025 年 8 月 3 日撮影。ちょっと見、草は生えていない。しかし、よく見ると、赤ちゃんのような植物が生えている。奥まで行くと、湖面が見える。

有峰ビジターセンターの道路を挟んだ向かいに北陸電力有峰記念館があった。その有峰記念館は 2024 年に解体され、現在は更地になり、学校の運動場のような痩せた土に、バラスが敷かれている。この有峰記念館跡地がどう変化していくか、みんなで予想したら面白い。

1 有峰記念館跡地という優れたビオトープ

有峰の遊歩道やキャンプ場を森林浴すると、森の現在の姿を知ることができる。このように、その時点における森を知ることが容易である。しかし、裸地から森に変わっていく姿を観察することは、難しい。なぜなら、その動きは緩慢で、何十年単位あるいは百年単位で変わっていくからだ。

有峰森林文化村の基本理念は、「水と緑と命の森を永遠に」である。永遠という言葉が入っている以上、時間軸にまで踏み込んだ学びをしようではないか。その好適地が、有峰記念館跡地である。

有峰の土地の所有者は、全て北電である。うち、ビジターセンターの背後の芝生広場は、県農林水産公社が管理をしており、毎年草刈りをしている。だから広場に木が生えてくることははない。しかし、有峰記念館跡地は、今後とも北電が管理するので、おそらく北電は草刈りをしないであろうから、何十年かけて森に変わっていく。

一般に、観察対象の森まで遠ければ、観察を続ける上の障害になる。ところが、有峰記念館跡地は、ビジターセンターの真ん前である。これは、とても大きな特典である。

有峰記念館跡地は優れたビオトープ（生きものの暮らす場所）である。理由は 2 つ。森の変化を学ぶことができることと、ビジターセンターの真ん前にあるということである。

2 有峰墓地の写真がヒント

1960 年に有峰ダムが完成した。その数年前に堰堤が姿を見せ始め、いよいよ水をため始める段階になった。旧有峰村の墓地は湖底に沈むことになることから、新しい墓地が、有峰林道西岸線と大多和線の分岐点から大多和峠に向かって少し先の所に作られた。2 段の更地が造成され、そこに家々の墓を移転したのである。旧村民の方々の集合写真がある。全員、羽織袴である。土地はむき出しの土である。当時は、その墓地から湖がきれいに見えたという。今は、その墓地には木が大きく成長している。湖を囲む木々が大きくなったので、現地から湖は見えない。白黒写真とはいえ、70 年近く経って、その写真が私たちに伝えてくれる情報の質は高い。

有峰村の墓地は、ビジターセンターから車で 30 分はかかる。有峰記念館跡地の方が、数段、森の変化を探るのに適している。しかも、その変化が、2024 年から始まったのだ。これを逃すのは、もったいない。

3 明治神宮の森から学ぶ

参考になるのが、明治神宮の森である。

明治神宮の森は、元は荒地だった。明治天皇が亡くなった後、全国から献木を植えて、人の手を入れずに自然まかせで放置してきたという。

<https://satakeda.com/2015/05/monolog11-3/>

同じ場所を撮った写真を見比べると、びっくりする。

このサイトには、年ごとの変遷が書かれており、興味深い。要約すると、

植樹直後は緑色の比較的樹高のある針葉樹をメインに、その周囲に黄緑色の常緑広葉樹の幼木を配置しています。実際、全国から寄進された樹種はその半分以上がスギ・ヒノキ・マツなどの針葉樹で占められていたそうです。しかし 50 年後、100 年後には針葉樹は常緑広葉樹との競争に破れ次第に枯死してゆき、150 年経つ頃にはすっかり常緑広葉樹を主木とした太古の原生林が再現されると考えていました。

ところが、針葉樹の枯死が早く進み、150 年たてば原生林のような常緑広葉樹を主木とした森になるという予想を 50 年前倒しにしてしまったように思えます。

金沢の兼六園などとは全く別の発想が、東京都民の憩いの空間を作った訳である。金沢の兼六園も、雪吊りをやめ、手入れをしなければ、ブナ林になるに相違ない。

4 有峰記念館跡地の場合

明治神宮の場合は、土に大きな穴をあけて大きな木を植えている。神宮の森は、裸地からスタートしたのではない。当初は人間の手が、加えられている。その後は、自然任せである。最初から、大きな木を植えたことが、藪になってしまうのを防いだのではなかろうか。

それに対して、有峰記念館跡地は、学校の運動場のような痩せた土にバラスが敷かれている。がけ崩れなどによって裸地が生まれたのとは違い、大きなハンデがある。草原になるまでに時間がかかる。

周囲には、ブナ、ミズナラ、シラカバ、ドイツトウヒなどの木が生えていることから、種はすぐにやってくる。しかし、如何せん、土が悪い。

2025 年 8 月 3 日、現地を観察すると、ミズナラの実生を 10 個ほど見つけた。ミズナラのドン

グリから生えたもので2センチメートルくらいの高さである。ドイツトウヒの松ぼっくりが多数ころがっていた。草なのか針葉樹の赤ちゃんなのか分からないが、クリスマスツリーのような形をした高さ1センチメートルくらいの植物を3個ほど見つけた。

5 学びを深くするために予想をたてよう

このビオトープ、観察しているだけでは、学びが浅い。どうなるか予想を立てることで、ぐっと、学びが深くなる。

私は、このように予測する。

冷タ谷キャンプ場の森と湖畔との境には、クマザサがびっしり生えている。そして、クマザサの中に木が生えている。有峰記念館跡地は、光が強いので、クマザサが、一時、天下を取るのではないか。そして、クマザサから、シラカバ等を経由して、ブナ、ミズナラの森になると予想する。

- 2024 年、裸の土地になった。
- 2025 年、ぽつぽつと植物の赤ちゃんが芽生えるが、圧倒的に裸地である。
- 2030 年、スギナ、ススキ、ヨモギなどの草地になり、遠くから見てもバラスや土が見えなくなる。
- 2040 年、クマザサに覆われる。クマザサの間からシラカバ、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ウルシなどが生えてくる。
- 2050 年、シラカバ、イタヤカエデ、ウリハダカエデが優勢な林となり、ウルシもあることから、林全体が秋には美しく紅葉する。
- 2100 年、シラカバ、イタヤカエデ、ウリハダカエデが衰え、西側の猪根山遊歩道のようなブナの若い森になる。ミズナラも生えている。
- 2150 年、ブナとミズナラの巨木の森になる。

私は、現在 69 歳。長くて 30 年しか生きられまい。そんな私が 125 年後を予測することに面白みがある。

6 みんなで予想を楽しむ

みんなで予想しあおう。予想したら、有峰森林文化村新聞に投稿しよう。

いつかはこうなるでは面白くない。何年という区切りが不可欠である。間違っても当たりまえ。林業の専門家でも、なかなか当てられないだろう。明治神宮の森でも、50 年間違ったのである。

本やネットで調べれば、ある程度予想できるだろう。しかし、西暦何年にこうなっていると予想するのは、実に難しい。

分からないからと予想しないよりも、なんとか苦労して予想するほうが、学びは深くなる。

7 有峰記念館跡地で写真を写すことを習慣にしよう

有峰記念館跡地の強みは、有峰に行ったら、誰でも簡単に立ち寄れる場所であることである。みなさん、有峰に行ったら、有峰記念館跡地で写真を写すことを習慣にしてほしい。いずれこの地は、森になる。その時、その時で、こんな状態だったという記録になる。つまり、だれで

も気楽に定点観測できる場所なのである。

数十年経って写真をみると、みんな感動するに相違ない。大正期の明治神宮の写真を見ると、うなってしまうのと同じである。